

雙魚堂雜錄

四

明治四十二年十月下浣起筆

特別
14
1919
243



復讐を被る也

明治四十二年十月廿一日起



○此紙はあの新記念紙をそと指のあは
すの刻し印一と山形印と傳ふしと
兼し一と記念印也



のつししよしや田崎彦たうりすもろ金と日取味の
人也たろねき行くの危るを示す、十田崎一正を
廣くしすろ示す、居て般又は少き善、湖是
子寧、此のあゝ明ま勝せ大路うるのち、阿ま
書之サマおの、一まをう、物りも物、格も
文章又、如也、今う、如、其、真、好、ま、一、阿、ま、ろ、し、書
ま、ま、の、好、ま、の、格、し、文章、潜、深、縦、格、あ、の
書、阿、ま、り、の、色、示、る、れ、も、古、ま、の、阿、ま、り、の、方、優、の
を、免、也、子、宮、平、し、と、阿、ま、の、書、と、格、し、其、書、格、の
宛、ろ、う、雪、格、と、久、し、く、今、う、あ、ま、の、書、格、し

終る今うの、如、し、格、し、致、し、し、を、傷、也、阿、ま、ろ、し、と、ま、お
書、阿、ま、の、文、右、の、如、し

美玉徳列書 猶候、清、あ、之、状、書、正、一、看

才、ち、い、ぬ、如、清、者、魚、下、し、一、先、以、有、加、尺、候、
え、ま、ろ、法、格、と、清、平、ま、入、候、う、し、ま、ろ、次、入

異本、聖、書、と、被、仰、さ、候、異、本、と、ま、い、う、ろ、ろ、
本、い、ん、如、承、ふ、る、候、永、無、願、を、此、中、に
つ、も、可、愛、也、危、真、聖、母、犯、不、犯、草、草
典型、一、々、存、可、愛、云、鹿、の、軍、之、碑、七、亦

物之名高且李公望元之倣效可謂不
ハ其ぬる子ハ飛ぶとりの命し
實考亦法帖書之格本と仰て修之
ハ其日訪るる年久しうとる之よりんは
ハある中へく(修後)之草書跡為草略
方あり似るを辨するより由是之法家
原帖と申候は其其説を以て之を
一説を以て今為覺見説也
王弼州云 新鄭高少師撰花東坡草
聖跡為字記并石本跋細閱無一坡法

而尚草道逸形動中有正書却近偽吾斷
以為逸草書以上因按坡仙跡為字記本為
隸人書碑之義當正書今存正書跡
為字記此則草書且併錄跋語是東
坡書則不可有此跋也其死後所書無
可辨者而以為王逸草書則此有信據也
書史會要云王升字逸老龜善羊牯
士草書殊有旭顛轉摺態宣和間道
所作草書內庭稱之

其他漢化星鳳舞香高壽瑞午久入九

扱々盛るる流るるを尋る暇

扱都下近來おかしき事古念十次
即ち碑文を換しつと河三亥の屋敷
出で蓋子の清程をすううう三亥と流板
之色不尋之平北の親父の留守のを
扱一しし千前もあふり東江と
いぬけら備るるを今白の前集記
之清程をすうううの平北の
るる清程をすううう扱都下と
尚之念とすうう流平北二事

近來之笑柄

柏山亭流改修し侍を糸従よりくま
吉と候是も此の芝素元とくく持毛
之圓と流平の以來流状をを、子腐中
まを流出してと流状之流平の
と紫雲土之波起おえくいと
くは流えと流出都のり流平も扱
之下と流平の流平の流平の
扱を流平の人と流平の流平の
し出し見のり流平の流平の

兄の出奔をさんえくハ新居組といひの物と別
：門戸をたんとんとしとあつて御座るの
辛共心懸ておのれ物と高き節之折
けぬきけりて祈候はしと孰(た)くは性
ぬは出づぬとせしめとあつて得た今之御
物あつてとともあましとんとあつて
つとも同じこととらんとも月くらう千人といふ
く井もさうとあつてさうさうとあつて
ともを能く之人と出て七泣きし見るとの
才氣ありて新居組のあつて埋んこと惜云

八きの甚うとあつてしつちを出るよとハ
さうさうとあつて是れもさうとあつて
部、あつても古書畫も法帖も得ては
けんと十年前に板花とあつて、年々入る
さうとあつて一年しつて流りぬとあつて
物と候得が新居組の故一人とあつて
はとあつてとあつてとあつてとあつて
さうとあつてとあつてとあつてとあつて
乃神也亦若連とあつてとあつてとあつて
たんとあつてとあつてとあつてとあつて

へし湯挽いりしを不乾大丈夫の甚き
 書色ののろろ候得ハ足もさく見え
 才一ろろんを必之兼事母のひやく
 かせろろろろろ候子詮見之お千よ
 ろろろろろろろろろ思ひろろろ
 ちとろろ
 ちんとろろ手袋をちつとろろろろ
 御路とろろ扱之とろろろろろろ
 若とろろのろろのろろろろろろろ
 ちとろろろろろろろろろろろろ

ぬ比弄ろろろのぬろろろろろろ
 ちろろろろろろろろろろろろろ
 沼中をひろろろろろろろろろ
 小島之う園ひ孰房を扱危う園ひ文
 扱と仙字をかうとりのろろろ何をおも
 しろいとろろろろろろろろろろろ
 きえれろろろろろろろろろろろ
 かちれろろろろろろろろろろろ
 八けろろろろろろろろろろろろ
 ちろろろろろろろろろろろろろ
 ちろろろろろろろろろろろろろ

世よりいふ人さへは七分三分とすく平
らむと文法之精意かくのまじし

都言一分あり九分と御活御京言
み事山心懸御目てくんととめりま
候是も起ると昔も行らん天氏より
くく揚りうくく候とめりも終妃と
氣のありさうくく候とめり

昔事くう人甚山嶺とくく奉るく由
ゆ起るもあやもやもまじし
候とくくくくくく借もまじし
出たりいし

候是之御言をもみ候りん御世ん
候りみ御言もくくく都りくく
末の七御言もくくくく
又くくく御言もくくく
七ありくく女説書とめりくく
之御言もくくくく候とめり
七七御言御出也くくく
信もくくくくを意もくく
今もくくくくく候とめり
ふ七あり方を御言もくく

しんやうそんごめいごのひんごん

十一月

大正

大正

三治明 字方富 号穆翁 又孤峯 又竹軒

通称 常 右 左

三治明 字子謙 号 通称 松右卫门

二治元 敬 字 号 朴南 通称 竹三郎

一字巨室 三治竹 号 善吉 字 正寶 号 達南 通称 主膳

重要要畧著者

三治竹 号 善吉 字 正寶 号 達南 通称 主膳
三治竹 号 善吉 字 正寶 号 達南 通称 主膳
三治竹 号 善吉 字 正寶 号 達南 通称 主膳

北河 号 善吉 字 正寶 号 達南 通称 主膳
高槐 号 善吉 字 正寶 号 達南 通称 主膳

三治明 本所通り 下町西側 三治住 不真係 十吉 町方
家並帳 二日五十一 凡 嘉兵衛 又 寛政 度 町方
家別帳 二日 同 三 日 三 下 地 子 未 吉 斗 三 林 山 五 夕
佐野 尾 松 太郎 云々

是レ因ラ之申見ル元誠ニ事リ 後定地ヲ善吉却
之片原ニ在居セシト 推察セラニ 其故ハ元誠
中人呼ビガ片原先主ト云フ 又元誠ハ片原知事
片仲勉ナリト 後歎セシモ 百ノ見多クナリ

以上 三治明 清作 公 御 意 記 此 写 一 行 役 人 也
不 徵 中 野 穆 翁 不 徵 号 竹 意 新 保 人 善 吉 氏

教 寓 元 教 一 字 ナルニ

不 徵 竹 山 一 号 亦 吉 一 字 三 治 明 善 吉 氏 考 考 考 考 考

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

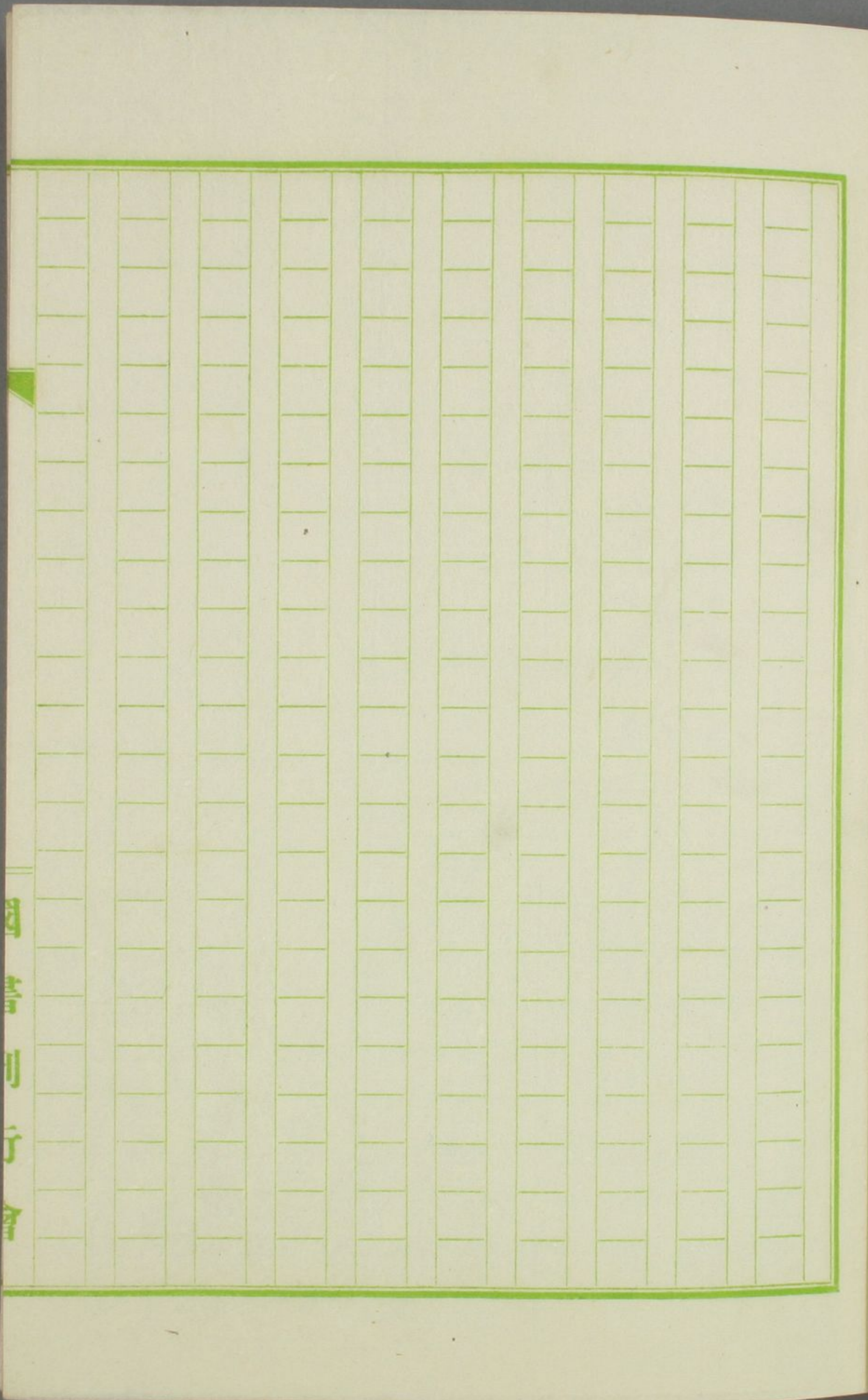
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき

あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき
あさきとさき





國
書
刊
行
會



國
書
刊
行
會

○十月廿二日 其田正峰の片喰毫末を原丸
 ；はめて其の紙巻の古書とをえり片喰を校及り原
 俊史の紙巻とて古書とを多く花巻とて以つ
 て都にえんあはしし以て一紙とを貴印さすゝゝ意
 あつと之の其の教僕と免以て一見せんとして
 思ひ立ち訪へてさうう山原翰施とて數十
 冊をえりあはしむらとを多しと流石とを多し
 々厚まの目か若のまゝとを多しと揚げ後少
 夫らりうあはしとてさう

古書刊行會

道長自筆 朱筆加正

論語筆記

論語解のまゝに曲子の講義は
也 為政第二の印をぬく

巻尾に羅山の朱印を捺す

朝鮮本

詩傳大全

一書欠

井家藏花印あり

巻尾に海峯

羅山系に在るの倭洲と出ず

巻尾に在るの跋読あり

東鑑

零本一

慶長治字本

足利の校印あり

曲直瀬の二自筆

註書

元正九年の三七十五才の跋読あり

杉永貞徳自書

徒丸印一殘齋

一少

畫幅三部

一舞廿之繪 尾款 光琳書

江古房定之印あり

一蕤鞭人狩獵圖 揚書

元人趙仲穆の書

至正四年の詠後

仲穆の趙子昂の子也

一衿羯羅摩子圖 江古内記後

土佐光成書

一金剛童子圖

春日克長書

古蓮院中三在慈因信正書

以上物二部等と云くは、(四)と云

るべしと云くは、(五)と云

一 文珠之圖

一幅

啓書記也

文珠之面顔山峯高の巻札と若ひ草
力敵健者し啓書記中の巻紙

一 五秘巻の巻紙

一

一 大勝の巻紙

傳

一

其の四巻とも云ふが、其の五秘巻
是より羅く一巻の巻紙は、其の巻紙
は、其の巻紙

一 曾我の巻紙

巻紙と巻紙の二物也

其の巻紙は、其の巻紙の巻紙を、其の巻紙
は、其の巻紙の巻紙の巻紙を、其の巻紙
は、其の巻紙の巻紙の巻紙を、其の巻紙

一 文珠の圖

極彩も、其の巻紙の巻紙を、其の巻紙
は、其の巻紙の巻紙の巻紙を、其の巻紙
は、其の巻紙の巻紙の巻紙を、其の巻紙

一 徳庵山宗を以て意

本河内光悦の歌

大抵是レ一

言を述の面を麻のる態を其如泥
を地於於のこころおきりるも也
光悦の西統の事とおぼゆるを得
七端の味の事と其意に光悦の
為題なり又伊豆の印を撰りて益
田を以て五千円を以てんを文海
し来りてその事なり

一 曾我素白

信本山素白二幅名

素白の磁器の氣をぬめ流るる
きしきしとせしき白の真平紙
とらんとらんとぬめあり

一 大納言の歌

大納言

一毛

大納言の市一民狼狽と云
オオの光景なりと云

一 相撲の巻

栞巻 一巻

土佐克弘の巻と伝ふ

一 雪村山舟小幡 栞巻

北地略す

明治廿五年十月廿二日 栞記

○小田守彦(著) 珊瑚庵の珊瑚の巻と伝ふ
 リキヤ、蓋が黄毛の染めたる紙と錯綜してつ
 きつ栞巻を著す秋成画も東洋希代の
 二枚と云ふ之半尾の巻白信美の跋あり云
 年交るるに於て二南園は城の石花の珊瑚庵の
 巻を著ししがこん貝の^姉妹巻と云ふし但江
 城の巻の巻と云ふるより一冊に記し珊瑚
 庵と上田村成の巻也

一 公認の秘書

一 秘書のゆくゆくは真面目

一 少年の秘のゆくゆくは却つてゆく

一 醜陋の態あるに似てゆくゆくは故味ある

一 度億年のゆくゆくは人成りか

一 劣物の為す所と云ふが実を生かす進化の

神祕伏在す

心
如
心
亦



花二石印一黙を高くし来り示こ

刻鈕とや古拙の意を

了くし鈕獅石と玉質を

新くは斑文多きこの其

名未詳ううう一見宋元

代のもの余念物わく花六

回くまん七字をみ獲んことを

物しん末に決せおと余終二

花六入らるる余の所赤や一の

このとらるる

張六甲 中井敬和 珠衣の瀛州教吏
 の印 粉鈕玉印にて刻と鈕の古
 拙の交 こんと 粉方格物とと 樂北の
 印を元んは 染れも 聯志を 括し
 得た
 瀛州教吏の印 余未以一尺を 既
 宗星名をうて 敬和に 刻するを とも
 敬和 珠衣の 甲と 元と 余と 刻し
 権入る者也と 一六 義父 侯印の
 道と 越と 曰く 徐福 遺之 友と

明治四十二年十月廿三日夜記

の為と山人 高其其 刻文 后 四友 八款と高
 く 一 考う 余と 癡人 ことと 勅を 元と 元と
 瀛州 古 西 拜 按 方 子 移ん 元し 所の とも 其 蓋
 中 蓋の 花 毛 川 林 教 人の 后 一 帖と 附る 余
 思 蓋 蓋 科 梅 の 大 元と 元と 其 の 廿一 履と
 物 元と 并 見 する 元と 履の 心と 元と 其の 元と 元と
 ちる とも 元と 唯 比 八 款の 山 其 其 其 の 元と
 為 却し 元と 刻を 傳う 元と 三 款 あり 元と 元と

笑世の儀々おもむきも平生の体々ありけ
且つ各款一七款歎くも而も傍をる廿
山と云ふ余遂に花二の勅めを成せり之れを
まじり

か林の序々之其世々の刻印一文三橋
の印二款と標す四々三橋の印之林の
の齋之也又四々余の以郷のるありて
而父の印の字ありて人を傳くは
此より遂々角々之れを名とすことあり保
せ記しと傳々のありて此の如し

○市村鑽杉中々日下高ボウ印人のる記する元
のりて云ふ印の字と云ふ今今も其の銘の自惜
の書画骨筆をすのておら出ししるては若くは
そのりて今も今も今も今も今も今も今も今も今も
しに記すのりて偶々果をゆりてを以て成てを
り列する今も今も今も今も今も今も今も今も今も
を以てゆき記すのりて偶々果をゆりてを以て成てを
余りありて考す所の流るるを流るる甲の流るる
今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も

東鏡流の山に海(或は二命を載す)新地吹雪の
河平城地自畫楚山の市村の朱舞お評帖某
氏の書坊の帖爪世の三風海の豆本大書函帖
をい由あく見さるけりし今も南海に在る二三の
古蘭共を獲りて行きし其氏を古蘭持り
り家もあがりける古蘭を出したるんを栗山二
海僧取の古蘭教す(をぬめりるものこそ而七
く感とる)海上おの奇をえくはるるを林松門
た書つし名額を福を書しある大物らうしに
んと名を念の其うも北吹の道は念こころさ

三刻を合し二系京の禮堂を請りんとををし
りしものと系正飾おしうぬるこのあるが丁
作しとて其通らん二似なるをなるとてこん
らこのあううとて思ふんがぬるもの也

(西暦四十二年十月廿五日)

○山に好回寺の所を店にりしと法を中住の
標本若干枚を納くる山に川興隆寺花散をえ文
明十二年(一)え飛天心込の年難を刻す約
ハをら山に刻しとてとをえぬ、系散ぬるを
減し刷の成法らしし、いふと体具補存の

國書刊行會

飯丸より受りしを二冊の文章と示さ
 りて、諸のうくさるる古本東寺王代記
 一と皇御寺略年記也世々私に海活本の印
 あり略年記に之を海皇大本を皇代略
 年記代して天正元年の事も記し
 と等しきもの王代記と大本枚数二をねらう
 上代も南北和らむの中は後述に及ぶを記し
 史料とするべきものの一を皇代略年記の編
 考よりあらかずを末にあらわすといとまらざ
 七早稲田のまきとむらさきのことにはむらさき

御通定をゆゑに、皇代略年記の文印有皇代
 略年記より現代作品の海皇と見え概して
 以冬依家とあるもの正統を認めし
 祝中一玉本の正統を畫し、正統は一羽で
 も今より元をゆゑ、春秋の撰は海皇四年
 の圖七而ち、或るえんは、大鏡の印、正統
 記の圖一と流を、大鏡の正統をえり、
 序は皇の御代式と画し、皇代略年記
 七凡そ、皇の御代式と画し、皇代略年記
 正統とす、皇の御代式と画し、皇代略年記

中の裸体の山男と目と意とをさした
 ○此の躰入し高麗城出し香をともちあ確心を示す
 ともあの置くも左の如し
 此邦のある所代のまじくも物舎のまぢへてま
 の可く移し高麗のむんはせししんしし重
 雨のふあき流るふちしう 流又と均なる
 代の均即うなると 流るはうりあま節なり
 作りたるこもさんは其流は流又目の上果
 の此の心なる如ぬこうう 現る此の意雨のま
 い高麗命を祀と流るもまじしあふむあ

あふむあふむ北のまじく白流まらこしや
 こんこふしつるき此こんを白流のゆるくを均め
 入り流しあふむこん也輪の田と一ひ
 山位なるしもの思ひさあふむを格とれと
 らしを配するこんさく而して往く宛有
 と出入出るを以てらんは佛具してあ
 香をの利用し或るこんを推知し得る
 ともさうりし格なるるるんは政とさ
 足ふ又さく此さくを初解の古流るこん
 しくさくと其格さうりて

前日爪生の話を載せしむるを元海し此の
とある話をゆくん正しゆと云ふ

左に取らるる^本とあるは野々山に接重也博物

図書の書より之を行すの記あるは終りた他

は二三に女を折るありくするもわわ一字

何んも不念のうと云ふ余り子存の分を以

つて見るもわわ一字と此とく^色染る人と云

へり此の香合^色にレキと云ふ^色秘色と云ふ

の御湯^色也り^色と云ふ者^色族^色と云

ち^色族^色と云ふ

上野博物館蔵

高麗泥合子銘

□家合子記

萬家合子記

萬家合子記

萬家合子記

圖書刊行會

○南朝文書一書を讀み入る。其首の文中
年長江寺表 落墨の立方(新禱文) 色別
廿二條を載ふ。こゝにハ階文あること
らる。長江寺と早く知處し。此の文
書のつとを載ししと之し。おのや(武田
五、二年の立る文書の副本と。きよの二(三)
あり。其書は四四年の竹書ゆり。立は
式と卷(一)之長(一)と載る。動社の
陸路年表を載しし得る。此の文は
尾の(一)と(二)も記す。格お階上らる。

とまけんじ出末南朝の文書と史界の者
あことあり。此の書は中(一)の
ことおのりん(一)と(二)の也。其
田と(一)と(二)の也。其
中(一)のものと(二)のもの(一)と(二)のもの
○は(一)のものと(二)のもの(一)と(二)のもの
考す。此の書は(一)と(二)のものと(三)のものと
皆(一)のものと(二)のものと(三)のものと
と(一)のものと(二)のものと(三)のものと

あま(一)の人を抱ける(一)の印書也

の由とて思ふに、一出しに、其の三つ其の絶唱云
りとして、いふに、書法をうけ表せる、何れなる
を生徒のふゆと、いふ方を、思ふなり

○今はハ州印とて一函と書て、中より
一首を載す

聖くうす古中ニ秋の風

ハ州印、沈吟、於て天才あると、其のめを、是の

○林政一氏の草蹟を、其の己んと思ふ、おれに、以

て、其の流を、解る、鐵身草、正楷、序文、断篇

あり、正書、数本、を、蔵する、を、以て、その、と、は、こ

ろ、海、波、り、の、お、ね、の、ま、は、ら、し、と、い、ふ、け、り、信、道

信、言、信、元、兼、入、代、也、と、い、ふ、ま、は、ら、し、の、大、三、河、志、を、

文、一、二、篇、を、え、り、合、は、せ、し、一、巻、と、す、一、巻、と、す、林

氏、遺、書、と、い、ふ、他、の、林、氏、の、遺、書、を、い、ふ、は、是、の、

遺、書、を、は、わ、く、と、い、ふ、林、政、一、氏、を、一、冊、の、由、を、

ぬ、む、る、こ、と、を、得、人、歎、林、政、一、氏、に、絶、筆、と、い、ふ、し、道

高、書、を、善、く、し、る、も、高、書、の、由、を、い、ふ、か、う、し、

地、を、善、く、し、る、も、い、ふ、か、う、し、と、い、ふ、か、う、し、

多く、散、乱、し、て、印、の、遺、書、を、い、ふ、一、代、を、あ

つ、ある、こ、と、を、い、ふ、か、う、し、が

國書刊行會

國書刊行會

那先比丘經

佛說大品經

佛所行讚

本行集經

善曜經

釋迦傳也

無量義經

蓮華

法華經

蓮華

華嚴經

華嚴

涅槃經

天台

大智度論

觀無量壽經

阿彌陀經

楞伽經

時宗
真宗

維摩經

楞嚴經

山經

般若心經

手印般若心經

大智經

金剛經

理趣經

四十二經

梵網經

三論

禪宗
曹洞
臨濟

真宗

解深密經
——
唯識

〇祖典

八宗綱要

三四佛敎傳道緣起

某洲 正法眼藏

日蓮 御書

真宗 教行信証

(東)香月院
西)芳通院

真之 十少之書

天台 四教儀集注
十不二門

止觀大意

淨土 撰擇集

華嚴 衆人論
起信論

在溪

視心是夢物
二半鈔

〇刊行会身二切本の内、新章考、新経巻、
 と七三のや、や、う、ね、と、出、と、人、と、思、
 三、相、分、を、終、り、の、七、上、の、同、考、録、本
 と、授、り、し、や、直、り、し、の、を、決、り、し、稿、記、し
 け、し、の、左、の、一、冊、此、の、新、後、之、十二、冊、一、部、を
 め、り、終、り、し、一、冊、と、る、更、後、と、し、ん、後、此、の
 以、前、の、分、位、を、除、く、と、す、と、る、と、き、り、歟

珍書類從

名所記地誌部類

- 江戸産 延寶五 四冊
- 江戸麻の子 貞享四 六冊
- 江戸名所誌 元禄七 八冊
- 江戸総麻の子名所大全 寛延四 一三冊
- 控筆の一本 編後集 二冊
- 東都地行 延言之 四冊
- 江戸母子浦巻 享 一冊

砂子殘月 言 一冊

江戸砂子 加賀長尾通徳 言 二冊

江戸極細記 言 三冊

義葉の栞 言 六

江戸表禁物 言 一

下谷通志 山崎美成 言 一

高田雲在 大田留吉 言 一

東海名所記 浅井了意 言 八

上川竹富 天和三 言 四

狂歌旅栞 天和三 言 一

老妻紀行 元和三 言 三

東海及野路拾 寛永六 言 五

東海及野路記 寛永六 言 一

竹富物語 寛永六 言 一

京 重 十川五重 言 六

京 雀 寛文五 言 七

京 寺 路進 寛文七 言 六

山城四季物語 山崎子 寛文二 言 六

東 京 土 寺 延寶六 言 七

名所都鳥 元禄三 言 八

京の二年

与家二

○ 難波鑑

一 与家七

六

難波雀

与家七

一

難波雀

与家七

一

難波鶴

与家七

一

草堂分路大令

元川伝三俊

一

有馬名所鑑

与家二

一

小記部類

元禄以前并之禄

伊曾保物語 元禄言本

三

萬言物語

与家九

二

七人比丘尼

与家一二

二

女比物語

三浦為五

一

可笑記

如徳子

五

仁勢物語

与家九

二

根之介

与家二

二

近之乃の上

山田元海

六

堪忍記 浅井了意 八

小 厄 山元 六

因果物語 北条山元 三

水吉 記 池坊持次 三

为愚痴物語 曾我休白 八

二人比丘尼 鈴木山元 二

伽婢子 浅井了意 十三

浮世物語 浅井了意 六

○尤の草子 寛永二 五

○おとと海女 寛文二 五

忠孝水鏡 山和 二 五

男色花の染衣 杉丹 四 四

妙色花の染衣 杉丹 四 五

狗伝 浅井了意 七

小色明座 栗麻子 元禄七 五

新色之書 西條一介 五

瓜原大和花子 都錦 元禄一五 五

元禄为礼物語 都錦 元禄一五 六

女大名丹前結 西條一介 元禄一五 八

瓜原采女 西條一介 元禄一五 六

凡例 錦文紙 五

佛伽万物語 五

夕飯二十四巻 六

乱腔三本鏡 六

新小初光 三

鏡 日上 六

武及真砂記 五

武及緒徳板 五

平路了具余物語 五

新本部類 洋装 一冊

きのふはけふの物語 古活字本 二

百物語 五活二 二

一休閑東咄 寛文二 三

離物語 延宝八 一

露がけ午 元禄四 五

軽口力令力 元禄一七 五

新活笑眉 元禄二 五

軽口あら丸洒 宝文二 五

軽口町千代万載 五

醒醉笑 元和四

三

私可多味 中川孫重 空元文二

五

輕口大木 山雲子 延元八

五

枝珊瑚珠 齊備宜 元祐三

五

露彩輕口 元祐二

五

心直吐大金 齊備舟 元祐二年

五

輕口福庵之 元祐六

五

不口利益吐

五

唐漢家奇奴新類 元祐六

一

字真居之古今賦格

三

但懋如款 洋裝 一冊

卷雜篇 唐詩雜 寫本

舟之左 寫本

二見真砂

潮來風 寫本

活笑草話不款 寫本

都而とりくとき 寫本

古唱集 伴修友撰 寫本

雜篇 日次仲舒撰 寫本

勁逸集 小幸玉記撰 寫本

二見真砂續篇

流東考 寫本

竹堂集 寫本

俚謠片々 七聲 口人撰 寫本

糸竹大全(奴風大ぬき 知之方之媒) 之祿一。

つよらふ 一 之祿版

直島抄 一 卷集

世里抄 一 迎陵贊

色竹南曲集 一 寫本

一

二

一

一

一

一

一

一

一

六

一

一

一

二

三

一

二

一

一

鳴鳥
後撰
幸茶集

六

狂句狂詩却類 洋裝 二冊

一 訓凡柳多留 自大序至五。編 五十冊

一 十番詩合 寛文八

一 閑居放言 現古道人 明和子

一 茄子腐草 可文子 明和子

一 掃溜先生詩集 万葉物真香 明和八

一 勢多唐巴詩 胡城藏古海 明和八

一 片紙先生詩集 出万葉集 明和八

一 物澤様詩集 利子 安永八

一 本了文醉 懐唐秋人 天明六

圖書刊行會

武城詩歌集 正金羊日

淺草遊文 大城 明和七

松尾富詩文集 明和七

凱歌之咏 和亭 明和八

毛漢夢先生紀行 海堂 明和八

太平遺響 銅脈先生 明和七

通詩選 四山人 天明三

通詩選讀解 四方山人 天明七

黑珂稿 蕨敷 天明七

狂詩選讀解 四方山人 天明七

太平遺響二集 銅脈先生 天明二

町詩選 湖島 天明二

忠詩選讀解 在言堂 文化二

太平抄曲 安穴 文化三

天保山百首 仰山 天保六

茶葉詩 方外道人 天保年

狂詩畫譜 銅脈先生

江戸名物狂詩選 方外道人

馬車早詩集

後井軒

一

一

一

一

一

二

一

一

二

一

一

一

一

二

一

一

一

一

一

一

狂詩選 獨果山人 三〇七

興詩選 獨果山人 惠政元

二大家風雅 劍歌 痛憶之至 惠政二

青物詩選 慘了軒 惠政三

唐令義宣詩 錢唐翁 惠政二

三才選中詩選 野泉金 文政九

天保佳話 安六史 三保一。

能樂山人詩集抄 松花松 弘化四

戲場篇 劍歌之至

浪華獅子

一

一

一

一

一

一

二

一

一

一

年中歌詩

續太平文集

一

一

花街風俗部類

洋装

二冊

讀好色由來掬

貞享版

五

諸國遊所細見記

寫本

一

柳華通誌

寫本

一

あつち物語

寛永九

一

吉原つれ／＼失墜 延宝二

一

吉原草花引

元禄七

六

史林残花

昌山集
享保一五

一

吉原大全

法田東江
明知五

五

吉原年中行事

寫本

三

諸國色里菜々

貞享五

一

蘇の色

寫本

一

吉原雀

寛文七

六

新吉原常々草

元禄二

二

両巴危言

島山集
享保一五

一

吉原つれ／＼草

寫本

二

吉原讚嘲記時之太敷

寫本

一

北女闘紀原

寫本

四

新つれ／＼草

寫本

一

元吉原記

山崎集
享保一五

一

花街漫録正誤

妻木和節待字本
山崎美成

一

岡場所考

豊永子
字本

二

。 鴻原大和曆

天和三

四

浪花青樓志

一

廊中一覽

寛政三

一

浪花色八卦

一

烟華漫筆

一

夢のあと

享和

二

吉原雅考

大田南畝
字本

一

花街漫録正誤

抱一
字本

一

新古今異説正誤

享和

一

かくれ屋の記

石橋貞國
字本

二

鷗鷺一月千軒

寛政一

一

濛標

天明三

一

虚實柳巷方言

寛政六

一

浪花合八卦

一

崎陽英華

二

日記之行部類

洋装

一册

馬琴日記

世説馬琴
日記

六

會計私記

大田南畝
日記

一

市隱月令

桂樹了可
日記

一

霍果日記

廣南瑞月
日記

三

七、八、九日記

加同花庵
日記

一

輪池日記

屋代弘賢
日記

一

日支筆迹

山崎美成
日記

一

初午日記

荒木自存
日記

一

鎌倉紀行

白川常軒
日記

一

柳亭日記

柳亭舟巻
日記

一

花鳥日記

村田了房
日記

五

西遊日記

狩奇旅
日記

一

天保搜索日記

齋藤丹次
日記

一

日人日記

遠藤日人
日記

一

公用日記

狩野晴川
日記

二

江戸見草

小寺玉兆
日記

一

一月玉銜

丹波西路
元祿二

三

東遊記

平賀仙舟
日記

一

御獄さうし

上田秋成
日記

一

伊香保く子之み

山岡俊明
字本

一

身延紀行

松平全成
自筆

一

朝清水記

英一蝶
字本

一

華山日記

隨筆雜書部類

洋裝 二冊

一 海錄

山崎英房
字本

二〇

我衣統編

関尾菴
字本

一八

浪華百事誌

空本

九

百戲述畧

齋藤月峯
字本

一〇

三 愚得雜載

吉野村忠節
自筆

一

過眼錄

喜多川尚信
自筆

一

阿國歌舞伎之記

字本

一

鎖之千卷

関山
字本

一

早稲田の四角にあり、四角に人、その所并、珍事の
御教を撰したるもの、其は、箱を、更には、考ねし、たるもの、

浮世くらゝ 字永反 一

伊予の伝説行の、その、くらゝ、御守、ある、の上、
長命、其、他、業の、書、御、身、振、を、記、たる、もの、

御藏前告吐 字永反 一

近世商賈職人書 字永反 一

後の水鳥記 字永反 一

袖そらし 字永反 一

一天地六仙伝 字永反 一

天の御妻の、首、紙、なる、

江風俗

飛鳥川 字永反 二

浅草寺慈願寺 字永反 一

櫻次考 字永反 一

江戸風俗志料 字永反 一四

武仁主表補心 字永反 一

ひろ小神 字永反 一

書刊行會

東伝と初め天竺語に因りて今もし辭作の
引れ文と集めたるもの

赤烏帽子

字本

一

正合年百伊勢守市川と源氏と居り
盛なりしと云ふ文と記せるもの

相模原集

式部卿
字本

一

宅曆風俗集

字本

一

芝場手引草

刊本

一

愚痴拾遺物語

馬文耕
字本

一

千手観音物語

字本

一

一七と草

二

厨草

松永貞徳

にきなひ草

反心齋

五

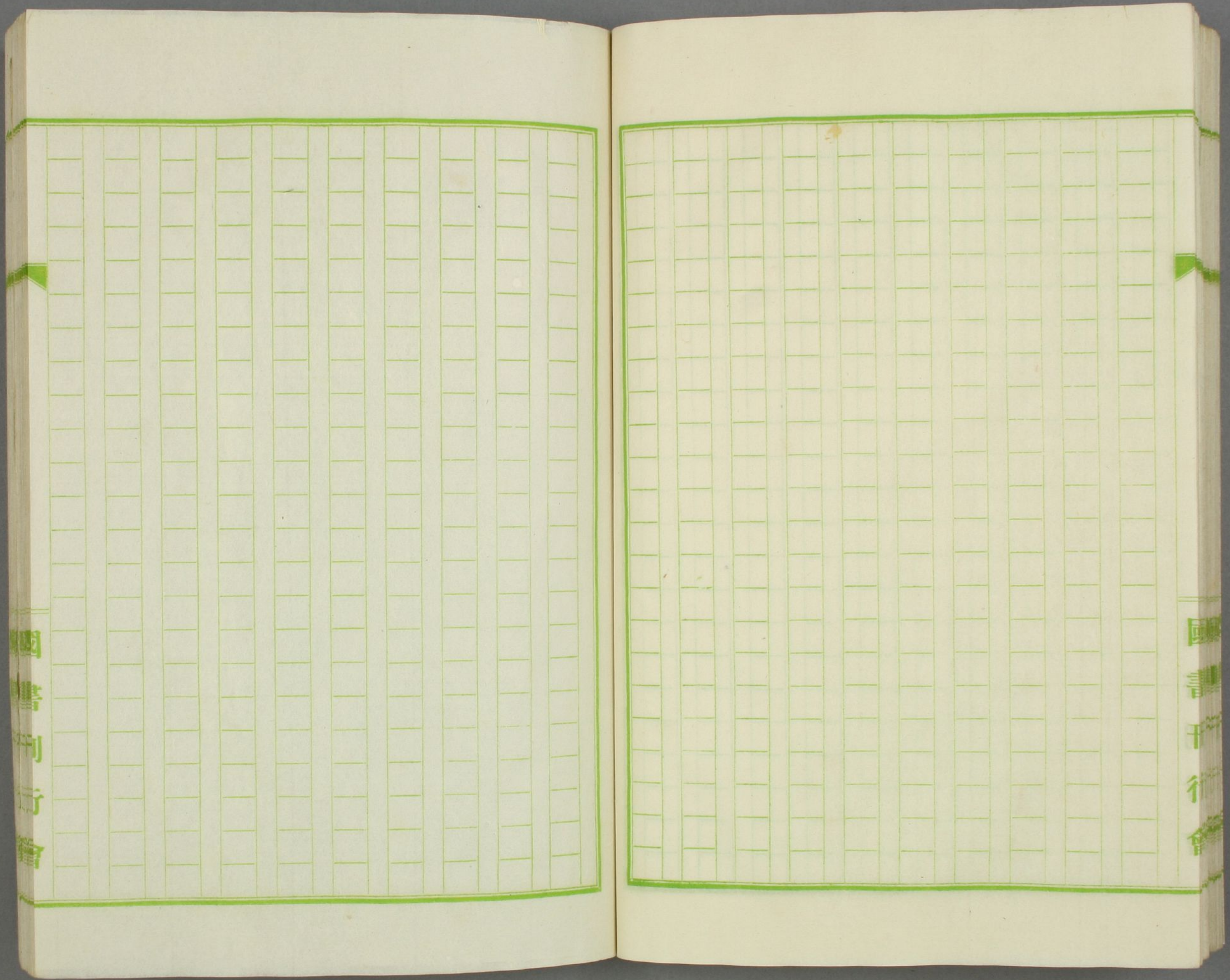
よ左んか片

寔文五

六

國
書
刊
行
會

國
書
刊
行
會



國
書
刊
行
會

國
書
刊
行
會

又此心歎む所恨不古人復出今却愛
を信地的心
此中も為るゝ所状もさるゝるゝ
お葉守何を此も首末一もとて
也何

十一月廿

意

原七三二印後

酒をのこさるゝく 拙者も
入るゝも政一ゝゝ

終云ぬ男酒ありんゝは 慈汗

此一箇か田の産をゝ 事功の
高し 五さる 原と 漸と の酒
道と家とゝとゝ 文孝子 剛孝と
ゝ山物の物 徹見く 雨也

○早稲田出版部の刊行は、^{出版部}協約出版者、漢籍刊行部
 と二千の雑誌者を含む（？）を以て、余の出版印
 入の目的なきに非ざる。然るに、此等の社会と
 して、此種の書を出版せんと欲し、其志の
 入る者の数は、何れの日も切迫し、二三千
 の数を達し、例として、全國書店も大抵
 の一に過ぎぬ。○又切迫部りの終るは、其
 人を加らぬは、約五千人に達し、休せし
 千の部を以て、ことごとく早稲田出版部を以て、
 其志を遂げ、先きに申す如く、

刊行も漢籍出版の計畫も、^{出版部}協約出版部とい
 はず、早稲田出版部といふ、市山氏の漢
 籍大系と、その美名を冠して、^{出版部}協約出版部
 といふ、と、雑誌と、刊行部を設け、其
 り、此等の雑誌の、^{出版部}協約出版部といふ、
 状態を、^{出版部}協約出版部といふ、市山氏の漢
 籍大系と、その美名を冠して、^{出版部}協約出版部
 といふ、と、雑誌と、刊行部を設け、其
 のこと、^{出版部}協約出版部といふ、市山氏の漢
 籍大系と、その美名を冠して、^{出版部}協約出版部
 といふ、と、雑誌と、刊行部を設け、其
 参る者、^{出版部}協約出版部といふ、市山氏の漢
 籍大系と、その美名を冠して、^{出版部}協約出版部
 といふ、と、雑誌と、刊行部を設け、其

史記と不紀をこそ宣うべきなりと云ふに列傳を云ふ
物なりと指す之を云ふるべきに云ふる者なきに文
其の讀むる前集を讀み後集を云ふに十八
史記のことも指す定名を云ふなりと云ふに
を以て報告し物なり大縣のゆゑ加ふるべき
ことなき不揃いなり是等と云ふに云ふに
や一向格なり終るるに格物して教規既に
現代語法の漢文法を四巻の體式に改む
ことなき大略なきなり 等々云々と云ふに
早稲の出版を志しごますに云ふに云ふに

りの書集を論じしもの云ふに我出版
の原を助房を云ふに云ふに新編の漢
双方既なり漢文故典と云ふに云ふに
おのめ結果を云ふに云ふに初た氏伝を
ゆゑの語を云ふに云ふに十二冊と云ふ
まうに云ふに云ふに云ふに除き其の
と左氏三冊を云ふに云ふに除き其の
四字解を云ふに云ふに云ふに云ふに
云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに
かまふに云ふに漢文記を云ふに云ふに

陽子女... 中土... 利... 高
人... 日... 人...
... 六... 七... 八...
... 九... 十... 十一...
... 十二... 十三... 十四...
... 十五... 十六... 十七...
... 十八... 十九... 二十...

(の... 十一... 一〇...)

〇... 風... の... 山... 大... 池... の...
... 一也

風... 姓... 韓... 章... の... 後... 名... 係... 字...
大... 春... 境... 又... 八... 岳... と... 難... ず... 高... 法... を... 池... 大... 池...
... 山... の... 大... 池... 也... 池... 川... を... 杜... ち... 係... 者... 一... 也...
口... を... 糊... 生... 草... 拊... 除... け... ず... 階... 危... 掃... の... 事... 一... 也...
十... 年... 一... 度... 存... 異... 書... と... 時... を... 用... の... 事... (大... 日... 本... 人... 名... 辭... 考...)

風... 神... 也... 孫... 吉... 木... 在... 石... 門... と... 小... 山... 舟... 時... 人... 登...
... 登... ち... せん... 登... ち... せん... 登... ち... せん... 登... ち... せん... 登... ち... せん...
... 此... 一... 幅... 均... 存... 一... 係... 一... 也

とまきちのゆひよして八狩もえしてその曲直
漸及三の迄字を又字にたとへてえまよひて版
たのきいともあつていふ。また此の版の
全片もしてその樂あるを悉くあつて又まじり
其一代の善作とていふことなる。其の善作と
あつて其の大部のいふことなる。この版のま
るのいふ。圖書録にそのたかやうのいふこと
きりしてこれもある。この版の他の圖書録
も備へてそのいふことなる。又日本に一つある
く男佐の解刻も一冊ある。圖書録にそのいふ

ことある。そのいふことなる。其のいふことなる。考へて
つとむる。解刻の法も亦一とてある。そのいふこと
此も亦一とてある。そのいふことなる。其のいふこと
此の古版も亦一とてある。朝解本とて流體抄本
とて亦一とてある。其の本に亦一とてある。其の
か命を亦一の亦一とてある。其の亦一の亦一の
其の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の
其の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の
其の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の亦一の

一 殿門の帯

此の久遠美田を以し杉原の題字を乞はん
と致すと余心希ふ痛んことを致し償を
つらける用也とす余侯の物に割くを思ひ
唯を致つ能くは有る事あり五十四元之候
美に然らぬ入ん事と五十四元は其れ
徳んと余直るを説して今うか中一のし
るのみ

此書書しとす此推廊上ありの事也山ありと
まのし州のありとす辛あつて
ハきうしく細言を起つてあり

園のぬ木世南とせし鴨形を樹の海いの人
と分韻記をひるす此推七もありとす
とすを言し候ん七六の句を以てす
又ありとす書書しと神款淋漓善し
此言きくき

所しとす此稜由事の云煙草を瑞
(松花の句)の云をを書き又題を
書す城もとい稜由書と木世南の
草とすし世南の書書と題
しとす時世とす改書とす

四十二年十一月十四日
太公家教

敦煌石室中の典籍

えんわしこののりまろ
救 堂 生

佛蘭西東方考古學校(在東京河内)教授 Paul Pelliot (伯希和)氏が、甘肅省敦煌縣石室中に藏せられて居つた經卷古文書類を得て、本國への歸途北京に滞在して居られるこのことを聞いたので、早速氏を八寶胡同の假寓に訪うて刺を通じた、實は氏とは未知の間柄であるから會つて呉れるかどうかと思つたが、「請」とボーイが案内をするから客廳へ通つた、氏は年齒三十位の青年紳士で如何にも學者的氣象の有る人である、此方が西洋語が出来ぬから氏は流暢なる北京語で會話を始められた、語つて見ると同氏の友人シヤバンヌ氏メートル氏等を通じて已に自分の姓名職業を知つて居られたから非常に好都合で、遠慮なく語ることが出来た

氏は清國西陲の地理古蹟等を研究の目的で一昨年本國を出

のがある、其方が我々の見るよりも確であるから左に之を録することにした、

敦煌石室書目及發見之原始

敦煌石室、在敦煌縣東南三十里、三危山之下、前臨小川、有三寺、曰上寺、中寺、下寺、下中兩寺皆道觀、下寺乃僧刹也、寺之左近有石室數百、唐人謂之莫高窟、俗名千佛洞、各洞中皆有壁畫、上截爲佛象下截爲造象人畫象、並記其人之姓氏籍里、惟一洞藏書滿中、乃西夏兵革時所藏、壁外加以象飾、故不能知爲藏書之所、逮光緒庚子、掃治石洞、鑿壁而書見、由是稍稍流落人間、丁未冰、法人伯希和、游歷迪化、謁長將軍、將軍曾藏石室書一卷、語其事、繼謁澗公、暨安西州牧某、各贈以一卷、伯希和審知爲唐寫本、亟詣其處、購得十餘箱、然僅居石室中全書三分之一、所有四部各書、及經卷之精好者、則均囊括而去矣、大半寄回法國、尙餘數束未攜歸、昨往觀、將所見及已寄回之書目、略記于左

顏師古立言新記明老部五卷

案舊唐書經籍志、有立言新記道德二卷王弼注、新志又有

王肅注二卷、隋志有梁深立言新記明莊部二卷、而此書則

諸書均不之及、

二十五等八圖

此書名、非圖畫、

太公家教

發し、露領中央亞細亞を経て新疆省に入り、庫車に入個月、烏魯木齊に二個月、吐魯番に數週間滞在して研究を續けられて居る中、烏魯木齊で長將軍に會つて敦煌石室の話聞き、巴里坤哈密を経て安西に出で知州の某から一卷の古寫本を贈られたのが、どうしても唐寫本に違ひない、で去年の冬敦煌縣へ出掛け三個月餘滞在して、同地三危山下石室の中に藏して居つた寫經其他のものを入手せられたのである、

大部分は已に本國へ送つたと言つて、手荷物中の數十品を示された、盡く驚心駭目の貴重品で、唐寫本、唐字經、唐刻及五代刻經文、唐拓本等のみで、紙質は黃麻白麻の楮紙の三種を出ない様に見受た、老子化胡經等は天平經中の最良なるものに劣らない、尙書顧命殘頁は文字雄勁、的確として唐人の書である、西夏兵革の時に石室を封じたまゝ、で近年に到つたものであるから、在室のものは不殘五代以上のもので、宋以下のものは一つもない、殊に西夏文字のあるものは半片もないのが確な證據で、學術上大した發見であると思つた、自分は内容を役に立てる知識は皆無であるが、趣味眼から見ても物々傍を去ることの出来ぬ珍品のみである、氏が奇籍を齎したと云ふので北京の士大夫中學者は勿論、古典籍に興味を持つて居る人達は續々氏の寓を訪問し、將來の珍品を見て誰も驚かぬ者はない、自分の手控によつて記録しようと思つたが、我々と前後して見た人の中で、羅叔言氏が書き留められたも

辨才家教

孔子修問書一冊

開蒙要訓

天地開闢以來帝王記一卷

百行草一卷

何晏論語集解存卷一卷二卷六

毛詩卷九鄒柏舟故訓傳 鄭注

范甯穀梁集解存閔公至莊公

孟說秦語中晉二

莊子第一卷

文字第五卷

郁知言記室修要

案郁疑郭之訛、日本舊鈔卷子本五行大義、背記所引古韻

書、有郭知言其人、

文選李善注存卷二十五卷二十七

冥報記

新集文詞九經鈔

新集文詞教林

秦人吟

燕子賦

李若立略出藏金

老子道德經義疏第五卷

唐均 切均小板五代刻本均殘

唐禮圖數頁

輔篇義記存第二卷

新集吉凶書儀二卷

李荃闕外春秋存卷一卷四卷五

案此書宋志著錄

唐律一卷殘

伯君言、無疏義、彷彿記有新增之例、據所云、疑即顯德

刑統之類也

故陳子昂集存卷八至卷十

據伯君言、十卷本係後來分析成卷、非原書之舊、此雖二

卷半、然尚多於後來之十卷本、

以上各書、均已送回法國、

沙州志四卷乃一卷斷爲四非四卷也

據伯君言、中有五代地名、然其書法唐人筆也、端制軍已

影照、

慧超五天竺國記一卷殘

伯君據一切經音義、定爲慧超所著、

吐魯番地志殘卷

末尼經一卷

首尾斷爛、然至精、末尼教經、今一字不存、此雖斷爛、

仍至寶也、

又有文德二年、中和三年、二遞真讚、其姓名忘之、
右另一卷

一 〇〇〇〇世碑 竇夫子撰
一 隴世李家先代碑記 楊授述
一 翟家碑 唐僧統述

右一卷
又一卷、記本寺收紙發紙數目、
皆繫年月日、

受罪懺悔文一卷

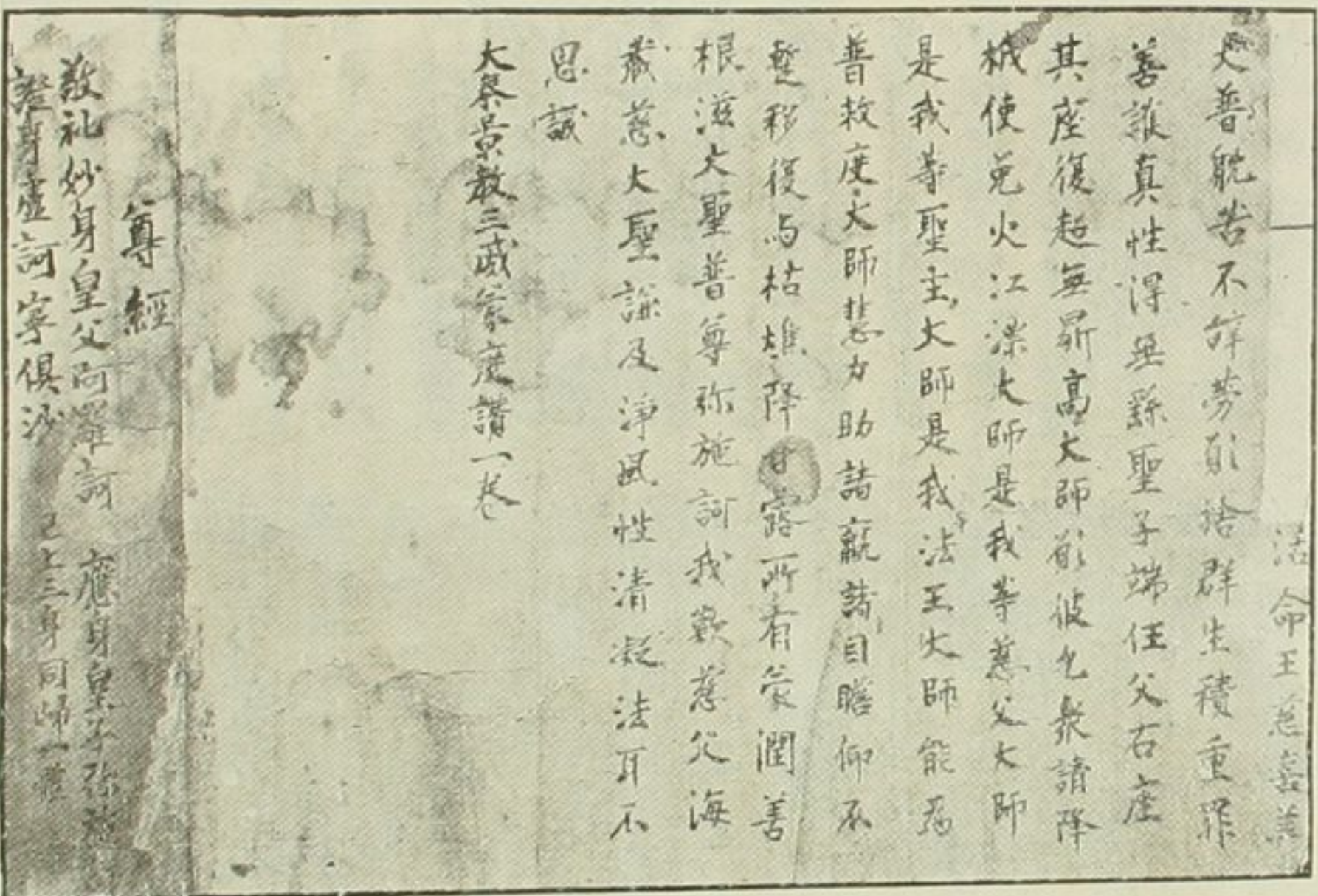
漢文及回鶻文、兩面對書、此外佛
經漢回對書者、有十餘紙、單回文
者有百餘卷、

陀羅尼經

(一)寫本 其形如旋璣圖、中爲佛
象、象旁四周皆咒語、欄外皆
經文、俱顛倒回環書之、又有漢
經對譯者十餘紙

又刻本 共十餘紙

(二)一切如來大尊勝陀羅尼加句圖驗
本二朝灌頂 國師三藏大廣智不空譯、每行十五六字
不等、其字似初唐人寫經、又國師國字、上空一格、



景教三威蒙度讚の部

景教三威蒙度讚一卷
唐繡佛說齋法清淨經一卷
計四十九行、行十七字、藍絹本、
先墨書經文、後加繡以白絨爲之、
每行有墨線界格、
尙書顧命殘頁
僅尺許、然異文不少、此頁以精經
帙後、
寺歷數卷
中間雜記施主功德獻納、及傳記、
皆表裏有字、茲記一二如下、
一 大瀉警策
一 大番故敦煌郡莫高窟處士公修
功德言
一 曹仁貴獻玉羚羊角礪砂表
三種在一卷上 中有沙州□
印
一 大唐前河西節度使押衙銀青光
祿大夫檢校太子賓客甘州剛丹
鎮遏充涼州西界游奕防探營都
知兵馬使兼殿中侍御史唐公諱通信遜真讚
大唐中和元年

僧悟真撰

辨才家故

其爲唐刻無疑

- (一) 大隨永陀羅尼 經末有□楊法彫印施六字、
- (二) 大佛頂陀羅尼 經末有開寶四年十月廿八日記十字、
- (三) 大隨永陀羅尼 經上面、左有施主李知順一行、右有王文沼彫板一行、經末有太平興國五年六月彫板畢手記十三字、

此外無年號者甚多

彫印佛像

九十餘紙、大半曹元忠所造、茲錄記文一紙、

弟子歸義軍節度瓜沙等州觀察處置管内管田押蕃落等使
特進檢校太傅譙郡開國侯曹元忠彫此印板奉爲城隍泰闔
郡康寧東西之道路開通南北之兇渠順化勵疾消散刁斗藏
音隨管見聞俱□福佑于時時大晉開通四年丁未歲七月十
五日記 匠人雷廷美

共十三行、上書下記、

唐拓碑三種

- (一) 唐太宗御製溫泉銘 剪表本、前半殘缺、後半完好、紙尾有墨書一行、曰永徽四年八月圍谷府果毅下缺
- (二) 化度寺邕禪師碑僅存剪裝一紙、字畫如隨蘇孝慈碑與流傳宋拓迥異、
- (三) 柳公權楷書金剛經 石刻本、裝成卷子計十二石、每

行十一字、未署長慶四年四月六日翰林侍書學士朝議
郎行右補闕上輕車都尉賜緋魚袋柳公權爲右街僧錄準
公書強演郡建和刻字、案寶刻類編、載柳公權金剛經、
會昌四年書、年月不同、不知即此否、

以上諸書皆目見

此外有畫板一、畫範一、經板一、均爲罕觀之品、畫板爲印佛
象之版、長方形上安木柄、如宋以來之官印、然畫範則以厚紙
爲之、上有佛像、不作鈎廓、而當鈎廓處、用細針密刺、以代
筆墨、推其意、蓋作畫時、以此紙加于欲畫之紙上、而塗之以
粉、則粉必透針孔、而著于下層之紙、便有細點、更就粉點部位
作綫、則成佛像矣、經板狀如□□□、兩面共書心經、而文
未完、左行墨書、上加以油漆、色白而澤、頗似今日之熟漆、
室中又有布畫佛像、紙畫象、及虎珀珠、檀香等物、
又寫經中、有絹本三卷、絹質極細、乃六朝人書、
又有經帙、以竹爲之、與日本西京博物館所藏相同、以竹絲爲
之、亦有以席草爲之者、蓋古人合數卷爲一帙、此即其帙也、
帙之裏面、以舊書糊之、有唐人公據一紙、上有印信、其文不
及備錄、

伯君言、渠所得有地契無數、皆有唐年月、又有唐歷書二三冊、
皆有年號、惜已寄回國不獲見也、

伯君言、諸窟壁畫、有繪五臺山圖者、記該山梵刹二百餘、皆
記其名、已影印、

羅振玉記錄

比利亞經由歸國之途に就いた、定めて向後種々な報告が發表
される事であらう、

(完)

専門家なる羅氏の記録に對して彼是言ふ點はないが、其中で
畫範は同説の如き用途もあらうが、石へ佛像を刻する時に使
つたものだらうとの疑を抱くので、針を刺した痕のあるのは
石へ紙を押付けて置いて錐の様なもので石へ當りを付けて彫刻
したものだらうと思ふ、畫板は柄の付いた大形の印刷では
見ても我邦百萬塔中の陀羅尼經の如きも、恐くは鑄物印刷の
大形のものであつたらうと想像される、羅氏記録以外に蠟紙
に記した印度文字の經文、西漢金山國皇帝勅文書の斷片等
を見た、更に石室中に在つたもので筆が一本ある、毛は硬さも
のらしく穂先は非常に短く軸も現代の筆に比して短い、我邦
天下筆と號するものに似寄つて居る、

北京讀書人の主催で九月四日グランドホテルに同氏の歡迎會
が開かれた、當日の出席者は實侍郎、劉少卿、徐祭酒、柯經科
監督、惲學士、江參事、吳寅臣、蔣伯斧、董比部其他十數名で、一
時の名流盡く集まる底の盛會であつたが、羅叔言氏が微恙の
爲め欠席せられたのは遺憾であつた、惲學士は立ちて伯希和
氏に盃を舉げ、斯學に熱心なる伯氏に天の嘉惠如斯厚きを羨
美し、伯氏は謙遜の辭を以て自己は國家によりて研究の爲派
遣せられ只偶然寶物を獲得したる迄の事にして、現品は佛國
政府の有に歸すと雖も、學問は世界共通たるべきもの故、撮
影謄寫等の希望には務めて應ずべしと答へられた、かくて氏
は北京の士大夫と應酬して、九月十一日夕前門發の列車で西



○漢政書抄抄本家の在る印一回く披雲閣印
書印一回く孝位閣圖書印 前者を二行肥大の
字未文後を一行枯瘦の未文、孝位閣印
も多く史料に採りしむと善し終史の以る編
輯所を没すは以來の印也余亦採り採りと
圖書を採りしむ抄試みる抄本印の在る
を不伯家宛へ令ししる方採りしむ終
るを余の余之んを採りしむ流るるを此印の
出せしむ抄しし余亦採りしむ印を必し之
んを不伯家宛へ令ししる方採りしむ終
るを余の余之んを採りしむ流るるを此印の

書を採りしむ抄しし余亦採りしむ印を必し之
んを不伯家宛へ令ししる方採りしむ終
るを余の余之んを採りしむ流るるを此印の
出せしむ抄しし余亦採りしむ印を必し之
んを不伯家宛へ令ししる方採りしむ終
るを余の余之んを採りしむ流るるを此印の

○本心切りしむ抄しし余亦採りしむ印を必し之
んを不伯家宛へ令ししる方採りしむ終
るを余の余之んを採りしむ流るるを此印の
出せしむ抄しし余亦採りしむ印を必し之
んを不伯家宛へ令ししる方採りしむ終
るを余の余之んを採りしむ流るるを此印の
二月廿五日の抄本家の在る印一回く披雲閣印
書印一回く孝位閣圖書印 前者を二行肥大の
字未文後を一行枯瘦の未文、孝位閣印
も多く史料に採りしむと善し終史の以る編
輯所を没すは以來の印也余亦採り採りと
圖書を採りしむ抄試みる抄本印の在る
を不伯家宛へ令ししる方採りしむ終
るを余の余之んを採りしむ流るるを此印の
出せしむ抄しし余亦採りしむ印を必し之
んを不伯家宛へ令ししる方採りしむ終
るを余の余之んを採りしむ流るるを此印の

もと琳瑯の書を存す花の生所辨ひし
 ことの死の書と云ふ琳瑯の書と云ふ花の
 作意の書と云ふ琳瑯の書と云ふ琳瑯の
 と云ふ琳瑯の書と云ふ琳瑯の書と云ふ
 之書物にひまの光の書物にひまの
 貴珠の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの

○その書物にひまの光の書物にひまの
 花の生所辨ひし
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの

花の生所辨ひし
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの
 の書物にひまの光の書物にひまの

○前年其書の書物にひまの光の書物にひまの

の物と高くしきりしものありし中法大徳
 の雨あらしに泣しとせしところ石の物をお
 書うとくし余の石籠の流るるの物と交
 換せんことを望むる物なりしもの又石
 の和亭の物并に余の方の石籠なりしもの
 さらしとせんは流るる他人の手に物なるも
 惜しく思ひたりしもの此の昔と昔とある
 したる石籠並に物とを求むる途代物して
 吾故の石籠と又和亭の物と流るるもの
 一七六流も又家あり物なりしもの並に
 物と

七と教も也而し和亭の石籠ありしもの
 余の石籠ありしもの縁とよみしもの
 一七六流も又家あり物なりしもの並に

物と素	野崎
月池	士清
栢森	因是
冬	三繩準
九	景
流	悲

時々のの皆未家存よりと平里茶邊に
御珠の珠とす

○十四日桂秀の版中本始末玉露(三冊本)を
高しし来りし下りし印志退花の遺計と
よみ書及所念平記本より補完(所念の書)
始末の目下より正補綴する所多し
珍本也

○布衣考合云米達而後古也陶の印も
あり書考文政十二寅年於二条邸(中)と
法橋仁阿彌代通(八)記とあり而古きより

るほど記入るるの御心は御定を
の御定をこそと河海各人の心をも
美書と二代の御心と及ハ記とあり
七代より書も又二代よりと家系御心
ありこれ又その内入ぬべし(四十二)
十一月十九日(五)

○古本方入初冊と稱え流るる御心
を得たりとや深き御心とあり
あつたるを今分男山とあり
思ひ支那味ありと稱すし

以て遺帝は朱漆を之に東二軒奈原中村を
 の鏡あり。其のまろく大ききる。此を徳川代
 のちまの代と云ひききんを思味あり。高木
 とんじりて読つて思くせんか松幹の遺
 什也。松とんを得るなり。いふる鳥りり
 うけつて此を獲たり。西二軒奈原
 の天目之をとも獲たり。松し其家。此き
 るぬるを備へる。一書あり。ちるもそるの
 家の重なり。神棚。供人もし。千を
 福んし。名ぬる。又珠をし。ちる。こし。

終り得る。松とん。こし。こま。松とん。保も。一
 おつぬる。松とん。油のり。おとせの。こま。こま
 へつて。松とん。いん。油のり。松とん。ちる。ちる
 ちる。くち。ちる。何とん。之の。松とん。

八

○松とん。こま。松とん。保も。一
 松とん。くち。ちる。何とん。之の。松とん。
 家の木末の。湯沸し。こま。ちる。ちる。ちる
 いち。ちる。こま。ちる。ちる。ちる。ちる。ちる
 大ら。松とん。松とん。松とん。松とん。松とん。



一、五の克徳の心筋多うホツク、市筋多う
 ン出、今も一二はなること改め揚げし
 とあむぬらぬものとの一にを得え、まゝ
 一寸先くと備り候う南寄りもてくる、南寄
 り其のちる、あふいあふい、あふいとあふいと
 ううとあふい代(橋)と或る聖の指し、聖
 指しとあふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいと
 う橋の丸をほちあふいとあふいと、乾燥し
 る、あふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと
 此の無を作ると苦心、あふいとあふいと、あふいとあふいと

七、五の一粒の薬物、あふいとあふいと、あふいとあふいと、
 作るとあふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと、
 一、乾燥する、あふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと
 ちくとあふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと、
 の大改のあふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと、
 出しまゝ、あふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと、
 高純、あふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと、
 け、あふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと、
 今、あふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと、
 貯、あふいとあふいと、あふいとあふいと、あふいとあふいと、

明代製作

大香盒

裏面に大の嘉靖年号の刻字あり

径約一尺三寸許 縁菊の花彫あり

地：華 中央に人物童子の

刻あり

時代更紗風な漆 桐箱附

陶工器の印

大茶盃

考拠：辛酉 古女のこひめのの刻

字あり

錦袖の蓋の裏に老代字あり

所

銘橋形の時代銘添あり

彩裏に

素瓦公の乳原公の銘

本主人家あり

高句麗好太王碑

遼寧輯安縣
廣寧北鎮廟內

同

明北鎮廟碑

同

元北鎮廟碑

同

明神宗即位奉告碑

同

清北鎮廟碑

同

明英宗聖旨碑

遼寧崇興寺

元居庸關銘

清國北京西北

元懿州路輿中州大通法寺碑

朝陽

元大奉國寺庄田記

表裏
義州

元大奉國寺碑

義州

明圓通寺碑

錦嶺

韓國天象列次分野之圖

平壤

回民謝恩碑

奉天

金三學寺碑

朝陽狼山

大清皇帝功德碑

韓國三田渡 溫溪文各一張

大石橋娘廟碑

大石橋

奉天清真寺門額滿洲文字

奉天

明普慈寺剝字碑

廣寧

大金喇嘛法師室記

遼陽

奉天清真寺碑

奉天

金雲頭城井石刻字及古瓦拓本

韓國會寧府

明奴兒干永寧寺碑

黑龍江口 浦塩博物館藏

明奴兒干永寧寺重修碑

同上

新羅真興王北巡碑

韓國京城

浩廣勝寺碑

奉天

清薩爾湖山戰事碑

奉天 遼寧 薩爾湖城

高句麗九都勒功碑
 後魏太和二十三年磨崖碑
 後魏景明三年磨崖碑
 遼興中府靈感寺舍利塔碑
 金上京寶勝寺碑
 金宣州大奉國寺碑
 金字臺碑
 金都統即君碑

鴨綠江右岸輯安縣
 遼西義州
 同上
 朝陽府
 吉林省阿什河
 遼西義州
 河南開封府
 陝西西安府

松本邦之持ぬり人うんは
 多きふつき何んは
 文の考きたるもの
 松本と
 松本と
 松本と

山本清海と新解本
 きんぎょ
 川と花と松と

田文果原言

海石と

交満志

大東歌玉

朝吟会歌

東文選

探録

堂のり

四朝人物考

大東詠

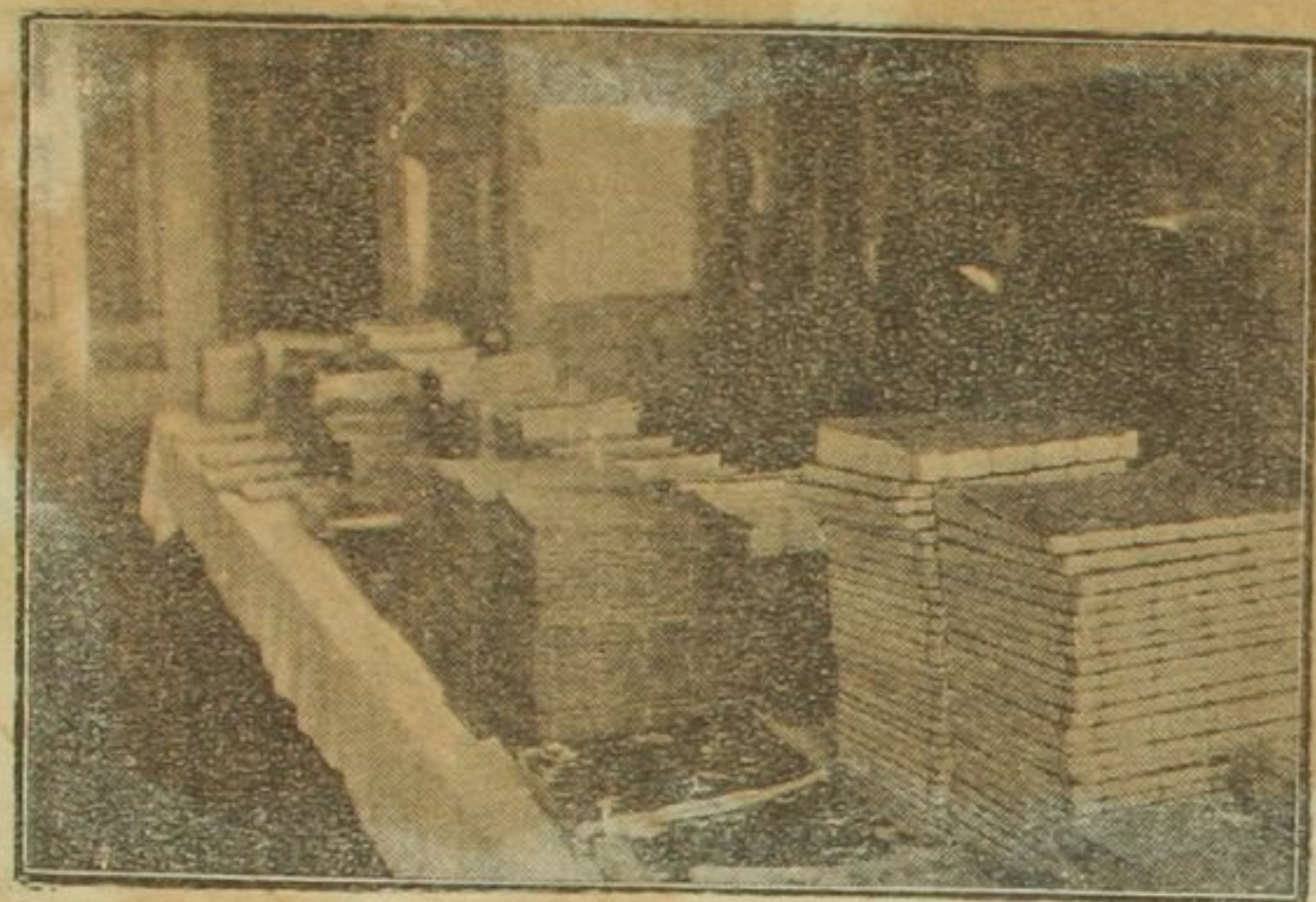
粟谷全集

鏡と皆ハルピンも持ひたるもの由も何んも磨
 きあつたことを惜みし此の中心に七女真文の刻
 し日ありて強き改くしと改しと
 朝人（元）を度降け或をまじりて北の事か
 こころ）十数個陳列しあるとらあり成化
 陽物を出し各人物を鈕とし各印或を
 裁り圓を刻し各鏡をのせ見入りたり

する處又博士の蒲瀨土産として同地博
 物館にて博士自ら復寫したる乾隆帝製す
 る所の盛京輿圖及び永寧寺碑等あり女真
 文字を現はせるものには金部統郎君碑、
 金宴臺碑あり其他古玉古錢古瓦合して數
 百點一として好史料ならざるなし展覽終
 りて午後二時より箭内文學士先づ調査旅
 行の概略を演説し次は白鳥博士「金の上

滿洲史料陳列其一

(朝鮮本及び滿韓古碑の拓本)



京に就てなる題下に抑ツングース民
 族勃興史の第一なる勳績より説き起し蠻
 類となりて朝鮮に高麗百濟と成り、挹婁
 帳を經て女真に至り、遼海國と成
 り女真は金となるの順序に及び旅行調査
 の結果渤海の上京を東京城に、金の上京
 を白城に發見せるを説き而して金、蒙古
 の爲めに亡はざる、に至り元明を経て三
 百年の後同じクツングース族の愛親覺羅
 氏滿洲に起りて清朝を樹立したるが愛親
 は金の語にて大金を意味し現朝も崛起の
 當時は滿洲と云はずして大金と稱せりし
 と現に陳列の大石橋碑、大金喇嘛法師寶
 記に明かに之を證せりとして金の滿洲史上
 關係重大なるを示し更に白城の古碑發見
 の次第及び金の五京の起原を易の八卦八
 畜の說に引證して之を論じ最後に頗る面

自古古錢論あり鏡の關係より例の得意の
 日本神代史解剖に入り三種の神器論を寫
 して其講演を結び四時半散會せり尙臺
 の舊慣調査より北滿洲歴史調査を思ひ附
 きたる後藤前總裁は斯の種の歴史調査が

將來の立法上參考として必要缺くべから
 ざるものなることを深く自信すると共に臺
 灣統治に當りて屢次古昔の制度に眞理を
 發見せし旨を附言したり

滿洲史料陳列其二

(古銅鏡古銅人及び古銅印等)



初藏傳寶鑑の巻之六に印思の六るの事
 世に家印は文づかふべの事
 以ての此六面に印の重なり
 来りるにむすむるに類はし
 なり



花六山人の死を言ふ事
 意の事余の一命を言ひ
 たるを述ぐ概す
 山人の余の家を治む事

三曲分前々たるいつも
 法天し晩年を興つて
 決つし、其の餘余の心
 止ありて永
 生に未比送り命けさ
 前ふ永決とる見り
 物に遺域移しうて
 此を聴くと女

向時よ走り未主人の
 此を本印を
 事前う
 見り、
 此のこ
 市集う
 氣格う
 きこの
 化相
 あり
 而ん
 余う
 二才
 流う
 して
 早く
 此を
 携る

桑式の
 天王
 守り
 権を
 回入
 多く
 集り
 する
 挽南
 石塚
 ありし
 余挽
 南ハ
 ルピ
 ン
 伊勢
 候の
 事、
 伊集
 初め
 今も
 挽南
 彦を
 引く
 金へ
 寄る
 初め
 入流
 うと
 云ひ
 何細
 あり
 のり
 子と
 流る
 挽南
 の疾
 の身
 を外
 んに

とて天依とて目みるに形の日つす金を祝
す

石塊四つ御湯の一幅未だ 湖南の執符を
書つてゐるなり又花六をさるの歎きぞ
と余石塊の湯のうゝ 湖南の執符のあ花六
の執符とちさき添へんことをいへる為とし
北の一幅と五峰の執符石六の陽の添へ
一幅と度葉花六の念作也此意を作
ふと夕大久保湖南未だ約ありと終る未
らう改すて二日を記しおしく今の石塊の一

湯を流ひるといんりぬ也ぬるまゝ今又念
作中の花六をまゝの余の新花六を
ぬ所あるべし也

此の字をすし月本はるすは御記

以下全て

白紙

